甲府市善光寺蔵『善光寺如来絵伝』考

吉原浩人

はじめに

武田信玄が信濃から甲斐に奉遷した、定額山善光寺（甲府市善光寺三丁目）は、国指定重要文化財五件・県指定文化財三件・市指定史跡一件等の、多くの文化財を有している。[1] しかし、これら世に名高いものは、実は宝物類のほんの一部であって、従来あまり知られることのなかった未指定品の中にも、数々の優品が含まれている。善光寺は、宝暦四年（一七五四）の回録にあったものの、信濃以来の重宝に加え、その後造立・奉納された仏像・絵画類を現在まで多く伝えているのである。それらの宝物があまり世に知られることがなかったのは、公の機関による本格的な調査が現在まで行われてこなかったからであろう。筆者は今後、順次そういった知られざる宝物類の紹介を心掛けていきたいが、小稿においては、まず『善光寺如来絵伝』の考察を試みることとする。

『善光寺如来絵伝』は、平安末期から爆発的な勢いで盛んになった善光寺信仰を広めるための法具として、盛んに絵解きされたようである。筆者は、善光寺信仰研究及び絵解き研究の一環として、これらの絵伝の紹介・研究を行ってきた。[2] そして、これまでに鎌倉期から近代にいたる『善光寺如来絵伝』約六十本の所在を確認することができた。その中で、現在学界に知られる中世の遺例は八本ある。およその成立年代順に紹介すれば、根津美術館所蔵三幅本（鎌倉期・重要文化財）・安城市本證寺蔵四幅本（鎌倉期・重要文化財）・岡崎市妙源寺蔵三幅本（南北朝期・重要文化財）・同市満性寺蔵四幅本（南北朝期・愛知県指定文化財）・長野市淵之坊蔵三幅本（南北朝期）・滋賀県安曇川町太子堂蔵四幅本（室町期・安曇川町指定文化財）・甲府市善光寺蔵二幅本（室町期）・藤井寺市善光寺蔵一幅本（室町後期～江戸初期）である。すなわち甲府市善光寺本は、僅か八本のみしか伝存しない中世の『善光寺如来絵伝』のうちの貴重な一本として、善光寺信仰を研究する上でも、また日本美術史の上でもはなはだ重要な存在といえよう。しかも、甲府善光寺には、これ以外にも近世中期・末期の二本の『善光寺如来絵伝』各二幅が存在する。一箇寺で三本の『善光寺如来絵伝』を有する例はたいへん珍しい。[3] 以下、それぞれ年代順に甲・乙・丙本と呼ぶ。小稿ではこれまでほとんど紹介される機会のなかった[4]甲府市善光寺の『善光寺

如来絵伝』について、まず室町期の甲本に考察を加えたのち、近世の乙本・丙本についても紹介していきたい（巻頭口絵写真1～6参照）。

一　『善光寺如来絵伝』甲本

1　概　況

甲府市善光寺蔵『善光寺如来絵伝』甲本は二幅の掛幅装。絹本著色、各二副一鋪。第一幅一四七・〇センチ×八一・六センチ、第二幅一四六・三センチ×八一・九センチ。両幅とも青色の湧雲で六～七段に分けられる。縁起絵伝にしばしば見られる札銘はない。

第一幅裏に「（二行墨で抹消）／甲州善光寺三国之絵像表補絵之大旦那御國様／御新佛別當三十八代傳蓮社心誉秀閑（朱印）／元和三丁巳暦卯月十五日」とあり、第二幅裏にも「御取■之■■■■■■■／日向半兵衛殿（以上二行は墨で抹消のものを判読）／甲州善光寺三国之絵像表補絵之大旦那御國様／御新佛別當三十八代傳蓮社心誉秀閑（朱印）／元和三丁巳暦卯月十五日」とある。両幅とも全く同じ裏書が書かれていたらしい。この裏書は修理銘である。ここからは、元和三年（一六一七）四月十五日、心誉秀閑の代にこの絵伝の表装を、日向半兵衛という人物が関係して修補したことが読み取れる。日向半兵衛は、元和三年当時の「御國様」である徳川忠長に仕えていた人物である。[5] しかし、のちに忠長は非業の最期を遂げたため、冒頭二行が抹消されたのではないだろうか。この「御新佛別當三十八代傳蓮社心誉秀閑」という僧は、現存の「甲府善光寺歴代譜」には見当たらない。ところが、『善光寺記録』巻一[6]には「寛永拾年當山専譽秀閑代、諸法度并勸物配當再ヒ相改候事」とあり、誉号が異なるものの秀閑という名が見え、同一人物と考えられる。秀閑は、寛永十年（一六三三）当時も、善光寺の諸法度を改めた実力のある住持であったようである。江戸初期は本尊が信濃へ帰還した後であり、歴代の数え方にも混乱があったらしい。[7]

甲本の成立は、絵相の表現の点から、十五世紀後半から十六世紀前半の制作にかかるものと、私は推定している。[8] 元和三年に修理されたということは、作成時期がそれを百年以上遡らせる傍証になるのではないかとも考えられる。とすれば、武田信玄が善光寺を甲斐に奉遷する以前に信濃善光寺において作成され、他の宝物類とともに、信濃善光寺より移されたものと考えられよう。なお、元和三年に補修が行われてから、小修理をした形跡は認められるが、保存状態良好とは言い難い。

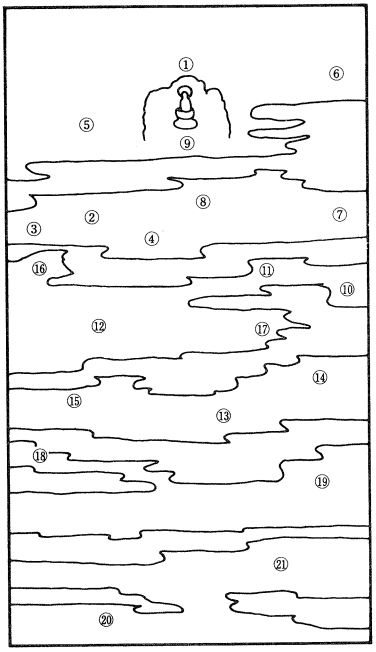
中世の『善光寺如来絵伝』で二幅というのは小規模であり、まだ他に一幅あったのではないかといった疑問を呈される方もあった。しかしこの絵伝は、以下に見るように善光寺縁起の殆どすべてを含み、場面数も決して少ないわけではないので、当初より二幅であったことは間違いない。ただし、善光寺伽藍図が描かれないのは、中世の絵伝には他に例がない。

2　画面構成

以下に絵相を解読する。完本の善光寺縁起のうちで最も古い続群書類従本『善光寺縁起』を主な典拠とした。（　）内は、甲本の絵伝には描かれないが、縁起展開の説明上必要なため、補った部分である。

第一幅

甲本第一幅梗概略図



(1) 釈迦如来在世時、東天竺毘舎離国菴羅樹園の大林精舎にて説法。

(2) （当時月蓋という大長者がいて、他の五百人の長者と共に国を治めていた。）長者は、五十一歳で授かった一人娘の如是を寵愛していた。長者は慳貪の心強く、釈尊の説法には耳を傾けようともしなかった。釈迦如来は、長者を教化しようと弟子を次々に遣わし、最後には自ら托鉢に赴いた。

(3) 長者は一鉢の白飯をも惜しみ、釈尊に供養することはなかった。

(4) 路頭の下女が米のとぎ汁を供養。如来は下女に授記を与える。

(5) とぎ汁を千二百人の大衆、二万人の菩薩等に灑いでも、なお尽きなかった。

(6) 長者をはじめとする人々の慳貪邪見の心が国中に満ち満ちたため、これに乗じて悪鬼邪神が乱入。

(7) 如是も五種の温病を受け苦しむ。名医耆婆も手の施しようがない。

(8) 陰陽寮を屈請し、種々の珍財を尽くし、泰山府君を祈り祀るが効果なし。

(9) 長者は大林精舎に往き釈迦如来に救済を請う。すると釈尊は、自ら病を治すことはできぬが、西宝極楽世界の阿弥陀如来の名号を称えれば救われると告げる。

(10) 長者は帰宅すると香華燈明を捧げ十念を称える。

(11) たちまち楼門上に、弥陀・観音・勢至の三尊が一光のうちに来臨。

(12) 一光三尊如来の放つ大光明により、如是姫は平復し、国中の悪鬼は悉く退散し、死人も蘇生した。

(13) 長者は、三尊の聖容をこの土に留め奉りたいと釈迦如来に願い出ると、目連尊者は如来の命により龍宮に赴く。

(14) 目連は、第一の宝物・閻浮檀金を龍王に請い、持ち帰る。

(15) 閻浮檀金を机の上に置き、釈迦・弥陀二尊が同時に光明を放つと、新仏が出現した。これが、現在の善光寺本尊・一光三尊阿弥陀如来像である。

(16) 新仏は、本仏を西方浄土に送る。

(17) その後、この新仏は、五百年に亙り天竺を済度した。

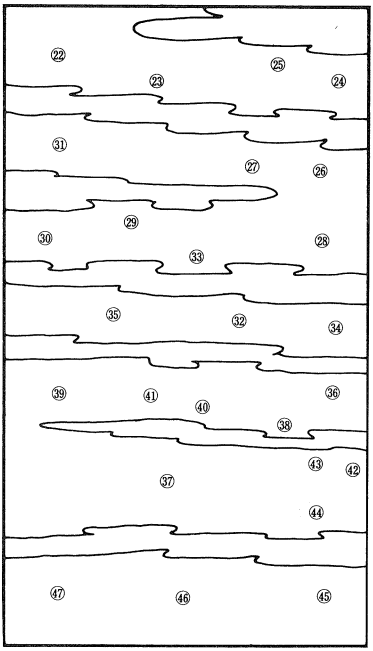
(18) 一光三尊仏が百済・聖明王の許に飛来。

(19) 一千十二年間済度した後、推明王の時、仏勅により日本に赴く旨を告げる。

(20) 如来を七宝鳳輦に戴き、僧俗男女が悲しみながら舟に送る。
(21) 舟は日本に向かい出港。后達は入水し、侍女達も後を追う。皆如来の霊力により、西方に往生した。

第二幅

甲本第二幅梗概略図



(22) 時に、欽明天皇十三年。本朝最初の仏像として経論等と共に難波の浦に到着。
(23) 如来は、百済の勅使二名とともに、内裏に向かう。
(24) 異国の仏に対し、朝議は二分し崇仏派の蘇我稲目と排仏派の物部遠許志が対立。
(25) 一光三尊仏を蘇我稲目に賜う。
(26) その後十九年を経て、熱病が国中に流行したため、物部遠許志は勅許を得て、如来を猛火に投じ、鋳物師は七日七夜の間吹き続けた。
(27) しかし、如来の相好は少しも損われることがなかったため、鍛冶大工に命じ打ち続ける。
(28) それでも損壊しないので、ついに難破の堀江に投擲。
(29) 黒雲にわかに湧き起こり、雲中より青色の鬼神が顕れ、内裏は炎上し、欽明天皇は崩御した。
(30) 遠許志は鬼神に鉄鎚で頭を砕かれ、無間地獄に墜ちた。
(31) （その後、敏達天皇も重病に沈み、勅使を難破の堀江に遣わし、再び如来を迎え豊浦寺に安置される。）遠許志の息子守屋は、父同様の上奏をし豊浦寺を襲撃。堂塔を打ち壊し僧侶を殺害。
(32) 再び如来を七日七夜鋳続け、同じく七日七夜打たせ続けたが、やはり損傷しない。（そこで再度難波の堀江に投棄した。）
(33) 母妃の夢中に金色僧が来たり、聖徳太子懐妊。
(34) （敏達天皇は崩御し、）聖徳太子の父用明天皇も二年で崩御。
(35) 守屋の悪逆非道が増したため、聖徳太子は守屋討伐に立つ。
(36) 一時太子は敗走し追い詰められるが、神妙なる椋の木の幹が裂けて、太子は中に姿を隠す。太子の愛馬甲斐の黒駒は天に昇った。太子が脱ぎ棄てた履を軍兵が発見するが、白鶴となって昇天した。
(37) （太子は四天王に誓願を起こし、）八幡大菩薩の幡を先頭に戦った。守屋は跡見市尾の矢に射られ、泰川勝が首を取って、合戦は終わった。
(38) （聖徳太子は、一光三尊如来を難波の堀江に迎えようとするが、待つべき機縁ありとの仏勅により帰京する。）その後三十余年、

信州伊那郡麻績の本田善光が、息子の善佐と国司の供で上京し、難波の堀江を通りかかると、水中より突然如来が光を放ちながら善光の背に飛び遷り、前世よりの因縁を語った。

(39) ここに宿善の心たちまちに開け、急ぎ内裏に向かい推古天皇の勅許を得る。

(40) 善光・善佐親子は如来を供奉し信濃へ下向。

(41) 私宅の臼の上に如来を安置。如来は善佐の妻に前世の因縁を示す。

(42) その四十一年後、善光の子善佐が頓死。

(43) 善光は如来に救済を乞う。

(44) 大焦熱地獄に墜ちた善佐を、如来が救済。

(45) 地獄からの帰途、獄卒に連行された皇極天皇に出会う。善佐は身替わりを申し出、天皇・善佐ともに如来に済われ、蘇生。

(46) 天皇は直ちに勅使を遣わし、親子を宮中に召して、それぞれ信濃・甲斐の国司に任じ、如来堂の建立を許した。

(47) 上洛時には貧しい身なりであったが、帰国の折には七百余騎を従える大行列となった。

3 特色

さて、絵相を読み解いてみると、甲本に特徴的な部分がいくつか存在することに気付く。それを他の中世の絵伝と比較しながら、検討していきたい。

まず第一幅では、(5)（写真7）が他に見られない場面である。ここは釈尊が橋のたもとで鉄鉢の水を川に流している様が見て取れる。(4)は、貧しい下女が釈尊に米のとぎ汁を供養したという話である。続群書類従本『善光寺縁起』ではこれに続いて、菴羅樹園の千二百の大衆・二万人の大菩薩・梵天・帝釈天・護世の諸天に灑ぎ終わってもなお尽きることがなかったと記している。実は(5)は、他の文字化・絵画化されたテクストに該当する記述がないため、同定困難な絵相といえよう。ただここでは、釈尊が鉄鉢を持ちその水を川に灑いでいるところから、下女の芳志に対する功徳の広大無辺さを表現していると解しておきたい。

(8)においては、月蓋長者が豪華な宝物を台に並べ、御幣を手に持ち供養している。（写真8）これは、如是姫の病気平癒の祈願に、陰陽寮を屈請し種々の珍財を尽くして祀る場面である。台の両端にも御幣を描くのは、泰山府君など仏教以外の神々を祀っていることを表現している。これも他の絵伝には描かれない、珍しい場面である。

写真7

(15)において、机の上に閻浮檀金を置き、新仏の出現を描く表現も面白い（写真9）これは、『善光寺如来本懐』に、

佛、ノタマハク、ナンチ、文机ヲ用

意セヨト、ヲホセアリケレハ、長者、シロカネヲモテ、ソノ用意ヲス、佛、長者ノ城ヘ、イラセタマウテ、カトニワタラセタマフ、生身ノ如来モ、文机ニ現シタマウ、

とある記事との関連が注意されよう。甲本では、文机というにはやや足が長いが、この系統の説に則って描かれているらしい。続群書類従本『善光寺縁起』では、閻浮壇金を金鉢に入れ、釈迦・弥陀二尊が同時に光明を放ち、迦葉尊者が三衣の袂で三度あおぐと瞬時に新仏が出現したとなっている。従って、甲本は、続群書類従本系の縁起のみでは解決できない場面を含んでいることになり、当時行われていた別の系統の縁起説を受容していることが考えられる。

第二幅上部では、(26)から(29)にかけて、物部遠許志の一光三尊仏に対する悪逆ぶりを描く。しかしこれと全く同様の行為は、物部守屋もそのまま行っている。そのため、各絵伝においてはこの場面を一度描くだけのことも多い。[9] その場合、絵解きの際には一場面を二度フィードバックする形で説くのである。乙本は、まさにその形になっているのであるが、甲本においては(26)と(32)に、たたらで鋳る場面が

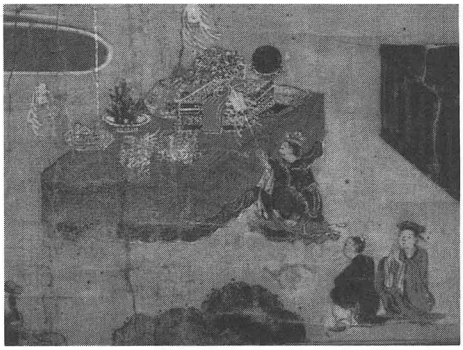


写真 8

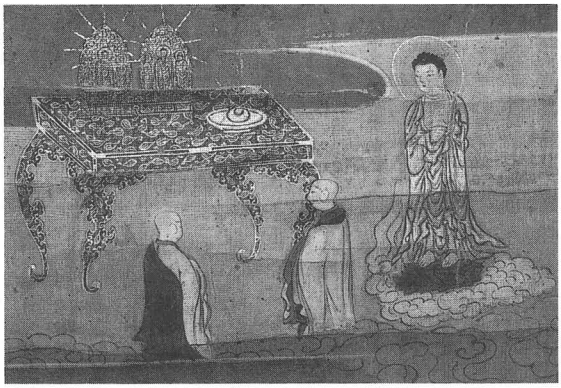


写真 9

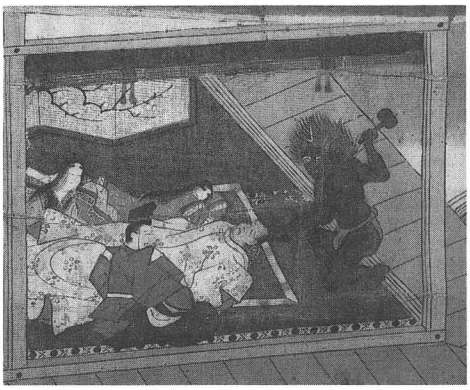


写真10

繰り返し描かれている。

(30)の場面も他にあまり描かれない。これは、物部遠許志が鬼神に鉄鎚で頭を砕かれ、地獄に墜ちようとする場面である（写真10）。続群書類従本では、鬼神の持ち物は鉄杖となっているが、縁起に記される看病の女房たちも枕辺に描かれている。

(34)は敏達天皇・用明天皇いずれの崩御の場面とも解すことができる。中世の絵伝においては、根津美術館本・満性寺本・太子堂本に用明崩御が描かれるので、いまは用明崩御の場面と解しておきたい。

(36)では太子が敗走し、神妙なる椋の木に助けられるという有名な場面。甲本には昇天する甲斐の黒駒と白鶴が描かれ、太子の足許には脱ぎ棄てられた履も描かれている。（写真11）天に昇る黒駒は小山善光寺本にも描かれるが、白鶴を描く中世の『善光寺如来絵伝』は、他に類例がなく珍しい。

次に、他本にはしばしば描かれるが、甲本には描かれない絵相に触れておきたい。

甲本には、道中は山険しく谷は深かったが、昼は本田善光が背負い夜は如来が加護したという場面がない。この場面は生身如来を強調する場合、欠かせないものであるので、殆どの絵伝に描かれるが、スペースの都合によるものか、省略されている。その後善光は、如来を蓬屋に安置することを畏れ多く思い、草堂を建立し奉遷したが、一夜のうちに如来は帰座し、結局如来は善光宅に留まった。これも有名な場面であるのだが、描かれてはいない。

また先述の通り、甲本には善光寺伽藍図がないのも大きな特徴である。これは、他の中世成立の『善光寺如来絵伝』いずれにも描かれていることから不審といえば言えるだろう。しかし、甲本が信濃の地で成立したとしたら、必ずしも伽藍を描く必要はないのである。縁起絵伝は、その寺社の縁起を語ることで、本尊や神と縁を結び、同時に参詣をいざなう役割をも果たしていた。ところが、目の前に大伽藍が聳え立っている場合は、必ずしも本堂を描く必要はなく、その寺の縁起のみを説明すればよい。甲本に善光寺伽藍図が描かれなかった理由も、その必要性がなかったからなのであろう。

甲本は、全体として小規模ながらよくまとまっており、室町期に描かれた数少ない『善光寺如来絵伝』の遺例として、日本宗教史・美術史上、貴重な存在といえよう。

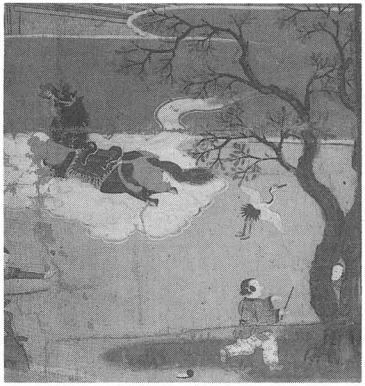


写真11

二　『善光寺如来絵伝』乙本

1　概　況

乙本も二幅の掛幅装。絹本著色、各二副一鋪。各幅一四一・〇センチ×八四・〇センチ。彩色も鮮明に残っている。平成二年に、表装の修理が行われた。制作時期は、江戸中期であろう。絵相も殆どが形式化し、美術史的には魅力の乏しいものとなっている。札銘はない。

絵相は、第一幅が天竺・百済、第二幅が本朝で、基本的には甲本

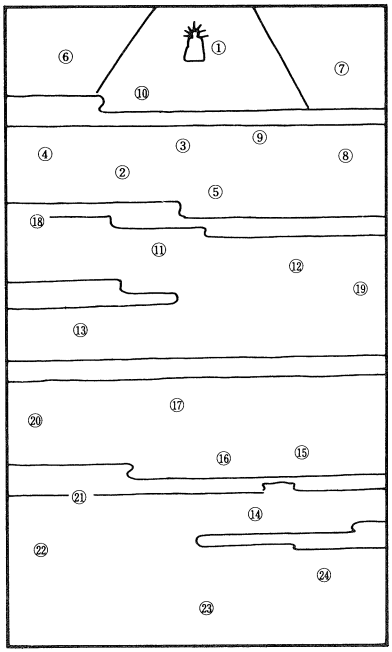
とよく似た構成をとっている。場面数も甲本とほぼ同じであり、基本的構図は甲本に近似しており甲本の画面構成を基本としつつ、他の絵伝を参照して制作された可能性が強い。

2　画面構成

甲本同様、以下に乙本の絵相を解読する。

第一幅

乙本第一幅梗概略図



(1)　釈迦如来在世時、東天竺毘舎離国菴羅樹園の大林精舎にて説法。

(2)　（当時月蓋という大長者がいて、他の五百人の長者と共に国を治めていた。長者は、五十一歳で授かった一人娘の如是を寵愛していた。）長者は慳貪の心強く、釈尊の説法には耳を傾けようともしなかった。釈迦如来は、長者を教化しようと弟子を次々に遣わした。

(3)　釈尊は、最後に自ら托鉢に赴いた。

(4)　月蓋長者は、一鉢の白飯をも惜しみ、釈尊に供養することはなかった。

(5)　路頭の下女が米のとぎ汁を供養。如来は下女に授記を与える。

(6)　とぎ汁を千二百人の大衆、二万人の菩薩等に灑いでも、なお尽きなかった。

(7)　長者をはじめとする人々の慳貪邪見の心が国中に満ち満ちたため、これに乗じて悪鬼邪神が乱入。

(8)　如是も五種の温病を受け苦しむ。名医耆婆も手の施しようがない。

(9)　陰陽寮を請い、種々の珍財を尽くし、泰山府君を祈り祀るが効果なし。

(10)　長者は大林精舎に往き釈迦如来に救済を請う。すると釈尊は、自ら病を治すことはできぬが、西方極楽世界の阿弥陀如来の名号を称えれば救われると告げる。

(11)　長者は、帰宅するや香華燈明を捧げ十念を称えると、たちまち楼門上に、弥陀・観音・勢至の三尊が一光のうちに来臨。

(12)　如是姫の病も平復した。

(13)　一光三尊如来の放つ大光明により、国中の悪鬼は悉く退散し、死人も蘇生した。

(14)　長者は、三尊の聖容をこの土に留め奉りたいと釈迦如来に願い出ると、目連尊者は如来の命により龍宮に赴く。

(15)　目連は、第一の宝物・閻浮檀金を龍王に請う。

(16)　目連は無事閻浮檀金を持ち帰る。

(17)　釈迦・弥陀二尊が同時に光明を放つと、新仏が出現した。これ

が、現在の善光寺本尊・一光三尊阿弥陀如来像である。

(18) 新仏は本仏を西方浄土に送る。

(19) 月蓋長者以下、眷属・五百人の長者は仏弟子となり菩提道に赴いた。

(20) その後、この新仏は、五百年に亙り天竺を済度した。

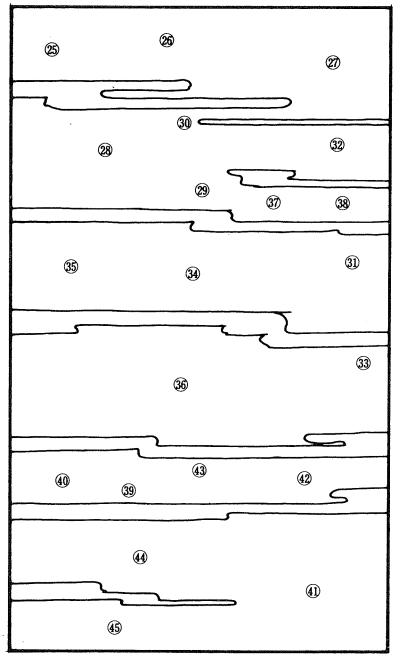
(21) 一光三尊仏が百済・聖明王の許に飛来。

(22) 一千十二年間済度した後、推明王の時、仏勅により日本に赴く旨を告げる。

(23) 如来を七宝鳳輦に戴き、僧俗男女が悲しみながら舟に送る。

(24) 舟は日本に向かい出港。后達は入水し、侍女達も後を追う。皆如来の霊力により、西方に往生した。

第二幅



乙本第二幅梗概略図

(25) 時に、欽明天皇十三年。本朝最初の仏像として経論等と共に難波の浦に到着。

(26) 如来は、百済の勅使二名とともに、内裏に向かう。

(27) 異国の仏に対し、朝議は二分し崇仏派の蘇我稲目と排仏派の物部遠許志が対立。一光三尊仏を蘇我稲目に賜う。

(28) その後十九年を経て、熱病が国中に流行したため、物部遠許志は勅許を得て、如来を猛火に投じ、鋳物師は七日七夜の間吹き続けた。

(29) しかし、如来の相好は少しも損われることのなかったため、鍛冶大工に命じ打ち続ける。

(30) それでも損壊しないので、ついに難波の堀江に投擲。

(31) 黒雲にわかに湧き起こり、雲中より青色の鬼神が顕れ、内裏は炎上。（欽明天皇は崩御した。）

(32) （その後、敏達天皇も重病に沈み、勅使を難波の堀江に遣わし、再び如来を迎え、豊浦寺に安置される。）遠許志の息子守屋は、父同様の上奏をし豊浦寺を襲撃。堂塔を打ち壊し僧侶を殺害。（再び如来を七日七夜鋳続け、同じく七日七夜打たせ続けたが損傷しないので、再度難波の堀江に投棄。）

(33) 母妃の夢中に金色僧が来たり、聖徳太子懐妊。

(34) （敏達天皇は崩御し、聖徳太子の父用明天皇も二年で崩御。）守屋の悪逆非道が増したため、聖徳太子は守屋討伐に立つも、一時太子は敗走。

(35) 守屋に追い詰められるが、神妙なる椋の木の幹が裂けて、太子は中に姿を隠す。太子の愛馬甲斐の黒駒は天に昇った。太子が脱ぎ棄てた履を軍兵が発見するが、白鶴となって昇天した。

(36)（太子は四天王に誓願を起こし、）八幡大菩薩の幡を先頭に戦った。守屋は跡見市尾の矢に射られ、秦川勝が首を取って、合戦は終わった。

(37) 聖徳太子は黒駒に乗り、一光三尊如来を難波の堀江に迎えようとするが、待つべき機縁ありとの仏勅により帰京する。

(38) その後三十余年、信州伊那郡麻績の本田善光が国司の供で上京し、難波の堀江を通りかかると、水中より突然如来が光を放ちながら善光の背に飛び遷り、前世よりの因縁を語った。

(39)（ここに宿善の心たちまちに開け、急ぎ内裏に向かい推古天皇の勅許を得、）善光は如来を供奉し信濃へ下向。

(40) 私宅の臼の上に如来を安置。如来は善佐の妻の前世の因縁を示す。

(41) その四十一年後、善光の子善佐が頓死。善光は如来に救済を乞い、大焦熱地獄に墜ちた善佐を、如来が救済。

(42) 地獄からの帰途、獄卒に連行された皇極天皇に出会う。善佐は身替わりを申し出る。

(43) 天皇・善佐ともに如来に済われ、蘇生。

(44) 天皇は直ちに勅使を遣わし、親子を宮中に召してそれぞれ信濃・甲斐の国司に任じ、如来堂の建立を許した。

(45) 上洛時には貧しい身なりであったが、帰国の折には七百余騎を従える大行列となった。

3 特色

乙本は明らかに甲本を参看していると考えられる。というのは、第一幅天竺・百済、第二幅本朝といった全体の構成が近似しているからである。また細部では、(6)で橋のたもとに釈尊と鉄鉢を描いたり、(35)に白鶴を描くように、他に図像化されるのは珍しい絵相を、甲本から踏襲していることでも明らかである。ただ、乙本のほうが全体にすっきりとした印象を与える。これは場面数が少ないからではなく、湧雲の占める面積を減らし、人物を甲本より大きめかつ少なく描くからであろう。個々の絵相は甲本に束縛されておらず、むしろ江戸時代の他の絵伝の影響を受けて作成されたのではないかと思われる。

また、甲本になく乙本にのみある絵相は、(19)月蓋長者が剃髪し仏弟子となるところを描く場面、(37)聖徳太子が甲斐の黒駒に乗り難波の堀江に一光三尊如来を迎えに行く場面、(43)本田善佐が如来に救済され地獄より蘇生する場面である。

三 『善光寺如来絵伝』丙本

1 概況

丙本も二幅の掛幅装。紙本著色。第一幅一五〇・三センチ×八一・二センチ、第二幅一五〇・〇センチ×八二・〇センチ。両幅とも形式的な金雲で八段に分けられ、各段は縦の線で細分化され、各絵に簡単な詞書が附される。縁起部分は全五十二段からなり、阿弥陀三尊像が縁起部分の最後に附される。この絵は、光寿院卍空の『善光寺如来絵詞伝』[10]の挿絵を粉本としたものである。また二幅目の下二段には、有珠善光寺の縁起が描かれるのが大きな特色となっている。保存状態は良好。平成元年に、表装の修理が行われた。

制作時期の上限は『善光寺如来絵詞伝』の刊行された安政三年（一八五六）、下限は明確ではないが、技法的にみて明治初年頃[11]と

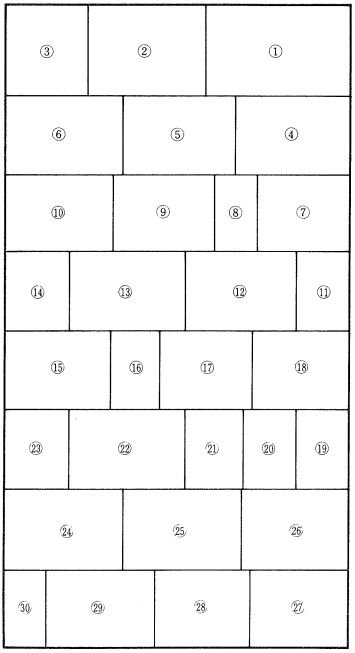
考えられる。ただし後述の通り、増上寺の蝦夷地開教政策に絵伝が大いに関連すると思われるので、私は幕末に作成されたものと推定したい。

2　画面構成（詞書）

以下に、各絵に附された詞書を翻刻する。漢字表記は原則として原文のままとした。

第一幅

丙本第一幅梗概略図



第壱段　月蓋長者慳貪にて佛にも施し奉らず

第二段　五種の疫鬼國中を悩まし長者の娘も危篤也

第三段　五百の長者月蓋を諫て佛に悪疫消除を願はしむ

第四段　月蓋五百の長者を従へて大林精舎へ詣る

第五段　佛月蓋の為に厄難を救ふの法を説玉ふ

第六段　一光三尊現し玉ひ疫鬼退散す

第七段　月蓋三尊の尊容をうつして此土に留めん事を願ふ

第八段　仏目連に敕して龍宮に至り閻浮檀金を求めしむ

第九段　龍王閻浮壇金を佛に奉る

第十段　二尊の光明金を鎔解して一光三尊の佛躰とあらはる

第十壱段　月蓋驚き新佛留り玉はん事を願ふ

第十貳段　三尊佛百濟國王の宮に降臨し玉ふ

第十三段　聖明王三尊仏を日本に渡し奉る

第拾四段　欽明天皇十三年十月三尊仏内裏に入る

第十五段　天皇佛像を拜し玉ふ事を群臣に諮ふ

第十六段　三尊仏を蘇我の稲目に賜ふ

第十七段　尾輿鎌子三尊佛を難波の堀江に沈む

第十八段　禁裏炎上

第十九段　敕使を難波の堀江に遣し尊像を迎かふ

第二十段　蘇我稲目詔をうけて塔を造る

第廿壱段　間人皇女御懐妊

第廿二段　聖徳太子御誕生

第廿三段　太子東に迎ひ南無佛と唱へ左手開き舎利を出し玉ふ

第廿四段　馬子豊浦寺を立つ

第廿五段　太子敏達天皇の御前に守屋勝海の奏上の非理を辨す

第廿六段　守屋勝海豊浦寺を焼く

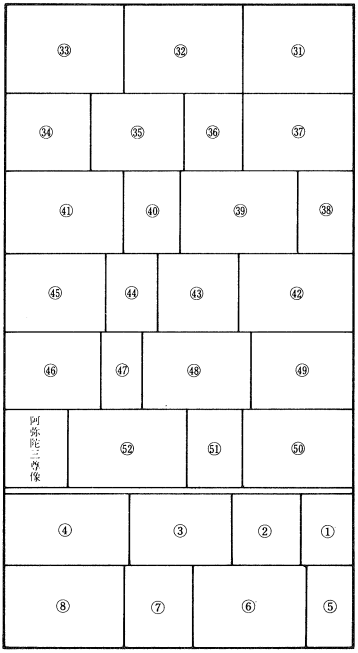
第廿七段　守屋三尊仏を鞆鞴にかけ鐵槌にてくたかんとす

第廿八段　馬子敕許を受け寺を立て尼を置き供養す

第廿九段　穴穂部皇子炊屋姫尊に通せんと謀る
第三十段　太子用明天皇の御悩平愈を祈り玉ふ

第二幅

丙本第二幅梗概略図



第三十一段　豊國法師召に應して参内し玉ふに守屋座を立て法師を睨む
第卅貳段　馬子炊屋姫尊の詔をうけて穴穂部皇子を誅す
第卅三段　守屋稲村城をきつき戦争の備へをなす
第卅四段　馬子稲村の城を改(ママ)む
第卅五段　官軍利あらすして退く
第卅六段　聖徳太子椋の大木に匿れたもふ
第卅七段　太子諸将をして四天王の像四十八を造らしめ勝利禱り玉ふ
第卅八段　毘沙門天の御使太子に鏑箭を奉る
第卅九段　官軍重て守屋を改(ママ)む
第四十段　秦川勝守屋の首級を取る
第四十一段　太子乱後に難波の堀江に至り如来の出現を祈り玉ふ
第四十二段　太子政を攝り參朝し玉ふ
第四十三段　本多善光難波の堀江を過るとき忽ち如来出現し其背におはれ玉ふ
第四十四段　善光禁裏の記録所へ如来の出現を訴ふ
第四十五段　善光みつから如来を負て信濃に歸り敕使之を送る
第四十六段　善光の妻弥生疑を晴し春臼の上に安置し奉る
第四十七段　善光艸堂を立て遷し奉れは翌朝見へ玉はす
第四十八段　一子善佐頓死し善光無下に如来を怨み奉る
第四十九段　如来地獄に降臨し善佐を救ひ蘇生せしめ玉ふ
第五十段　御堂建立に種々不思議あり
第五十一段　如来法滅の後に留り衆生を化し玉ふ
第五十二段　大和國の時丸巳に堕獄せしに利益を蒙る
（阿弥陀三尊像）
第一段　慈覚大師南部の恐れ山より蝦夷を見玉ふ
第二段　大師蝦夷を化益し玉んとすれとも時機未た至らす
第三段　大師有珠山の麓に宿り如来の降臨を感得し玉ふ
第四段　如来の霊告に因り大師自ら一光三尊の尊容を彫尅し玉ふ
第五段　貞傳上人霊像の朽壊を歎き金銅を以て鑄うつし玉ふ

第　六　段　有珠山噴火破裂し尊像は海邊の小丘に飛轉し玉ふ
第　七　段　台命を以て有珠山の麓に善光寺を創立す
第　八　段　辨瑞上人蓮華の霊告を受け玉ふ

3　特　色

丙本の絵相は、先述の如く光寿院卍空撰『善光寺如来絵詞伝』全七巻の挿絵を粉本としたものである。他に『善光寺如来絵詞伝』をもとに描かれた『善光寺如来絵伝』には、祖父江善光寺本・高田本寺専修寺本・明日香村向原寺本がある。[12]『善光寺如来絵詞伝』には、全部で七十図の挿絵を附すが、丙本においてはそのうちから五十三図を選択してほぼ忠実に模写している。捨象された図は、弘法大師・行教の阿弥陀三尊感得譚など、本来の縁起の展開に関係ないものが多い。絵の順序も全く『善光寺如来絵詞伝』に同じである。従って、丙本の善光寺縁起に関する絵相については、『善光寺如来絵詞伝』を離れた特色というのはない。

ただ、縁起部分のあとに、三輪時丸の地獄蘇生譚が附されているのは、注目しておいてよいであろう。この話は善光寺においては著名な話であるが、絵伝に描かれることは殆どないからである。また最後に、『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼咒経』所説の楊枝浄水法の本尊としての阿弥陀三尊像を、金地の上に描いている。脇侍観世音菩薩が楊柳の枝を持っているのが特徴である。『請観音経』は、善光寺縁起のもととなった経典。この図も他の図と同様に『善光寺如来絵詞伝』から模写したものであるが、絵解きの際の阿弥陀如来の救済を強調するために、ここに描いたのであろう。

さて、この絵伝の最大の特色は、第二幅下部の二段に亙り北海道の有珠善光寺について描かれることである。この二段は金雲の間に薄青の界線が引かれ、また善光寺縁起の続きではなく、再び「第一段」から始められ、金雲の形も異なっている。

この主要部分は、文化三年（一八〇六）成立の『蝦夷地大臼山善光寺縁起』[13]に基づいて描かれたものと推測できる。慈覚大師円仁は、天長年間（八二四～八三四）に恐山より蝦夷地を望見し、渡海してアイヌを教化するも時機熟さず、有珠山麓で一光三尊如来を感得し、自ら三尊像を刻んだと縁起に伝える。のち、亨保年間（一七一六～一七三六）に貞伝が、この像の朽ちたのを嘆き、金銅をもって鋳造したのが、今の有珠善光寺本尊であるという。亨保三年（一八〇三）より、江戸の増上寺は幕府の許可を得て、蝦夷地開教伝道の拠点として、有珠に新寺の建立にかかった。[14]この地は、古来より善光寺と称した小堂が構えてあったという理由で、この寺を大臼山道場院善光寺とし、香衣檀林格の寺院としている。つまり丙本のこの部分は、有珠善光寺の建立縁起譚にほかならない。有珠善光寺はアイヌ教化の拠点ともなったところで、当時アイヌ語の『一枚起請文』なども作成されていた。

しかし、ではなぜここで有珠善光寺の縁起を、丙本に附け加えなければならなかったのだろうか。増上寺が蝦夷地において新寺を経営するに際しては、多額の資金を必要としたことであろう。甲斐国浄土宗触頭たる善光寺の住職は、代々増上寺より送り込まれるのが通例であった。その関係の深い善光寺に、しかも同じく一光三尊仏を祀り寺名も同じ善光寺であるから、何らかの援助を要請されたのかもしれない。すなわち、この絵伝の制作目的は、蝦夷地開教に際しての勧進にあったのではないかと、私は推測する次第である。

四　絵解きの記録

以上甲・乙・丙の三本の縁起は、当然絵解きを伴った唱導説教のために作成されたものである。しかし、現在の甲府善光寺においては絵解きの伝統が絶えて久しく、古老に話を伺っても、絵解きを聴聞した記憶はないということである。

そこで、寺に残された文献記録を繙くと、いくつかの絵解きに関連する記事が散見される。[15] まず『善光寺記録』巻一[16]には、寛永七年（一六三〇）徳川忠長に金堂修覆再興の許可を願い、同九年に成就したという記事がある。[17] その直後に、

一、大納言様御望ニ而、供僧之内常円・玄等、御役人朝倉築後殿・日向半兵衛殿御奏者ニ而御目見仕、於御殿ニ当山縁記讃談仕、為御褒美、巻物并銀子拾枚頂戴候事、

とあり、年月日不明であるものの、徳川忠長に面会し、御殿で善光寺縁起を讃談し、褒美を貰ったということがわかる。この縁起讃談に絵解きを伴ったかどうか明記されていないが、前述の如く元和三年（一六一七）に甲本の表装修理に関わった日向半兵衛が取次いでいるところから、忠長の前で絵解きをした可能性は非常に高いと思われる。

同じく『善光寺記録』巻一には、明暦二年（一六五六）江戸下谷東福寺で霊仏・霊宝出開帳の折、「毎日当時縁記絵伝講釈、日二三坐仕候、講釈人者役僧之内堂照・玄良・常円也」とあり、参詣者に対し常照・玄良・常円の三人が、日に三坐絵解きを行ったことがわかる。この常円は前記供僧と同一人物である。[18] 出開帳の折に、絵解きに習熟した僧が説教を行なうということは、江戸時代を通じていくつかの記録が残される。しかしここで、絵解き僧の固有名詞まで判明する点、絵解き研究史上でもまことに貴重な記録といえよう。また二十数年を経て、同一人物が縁起を講説しているところから、善光寺内にそれを得意とする者が何名かおり、日常的にも参詣者に語っていたのではないかという推測も成り立つのである。[19]

時代は幕末まで降るが、『燈籠尊上京記』にも絵解きの記録がある。甲府善光寺の秘仏燈籠仏が、嘉永元年（一八四八）知恩院門跡の開封を受けるため上京、孝明天皇の禁裡にも参内した。その記録中に、有栖川宮の御殿内で「尊像絵紙伝」を宮が御簾の内より聴聞した記事がある。また、燈籠仏の噂を聞きつけ、雨天にもかかわらず大勢の参詣者が宿舎に詰めかけたため、「絵紙伝等かけ、よミきかせ申候」といった記事もみられる。この時使用された絵伝は甲本であるか乙本であるか判明しないが、善光寺の縁起を語る際に絵伝が大いに利用され、また都においても貴賤上下を問わず、積極的に受容された様子を想像できるのである。

おわりに

如上概観したごとく、甲府善光寺には、特色ある三点の『善光寺如来絵伝』を蔵する。このこと自体、全国的にも非常に珍しいことであるが、特に室町期の甲本は、中世の宗教史や美術史上、重要な価値を有すると思われる。乙本は甲本の影響下に成立した絵伝として意義を有し、丙本は有珠善光寺縁起を含む点、他に類例を見ない存在である。そして、断片的ではあるが、出開帳の折などに、実際に絵解きが行われたことが証明できる点、絵解き研究の上でも貴重な記録となっている。絵解きの場の解明等、言及できなかったこと

については、今後の課題としたい。

註

（1）山田泰弘・吉原浩人『甲斐善光寺』（善光寺　一九八二・四）等参照。

（2）『善光寺如来絵伝』を主題として論ずる拙稿は、以下の通り。なお、(a)・(b)は、その後の筆者の調査の進展によって補訂すべき点がいくつかある。

(a)「『善光寺如来絵伝』覚え書――絵相並びに絵解き研究の課題――」（『伝承文学研究』第二九号　一九八三・八）

(b)「絵解きと善光寺如来絵伝」（一冊の講座『絵解き』有精堂　一九八五・九）

(c)「安曇川町太子堂蔵『善光寺如来絵伝』考――続群書類従本『善光寺縁起』と絵相との対照を中心に――」（『研究年誌』第三〇号　早稲田大学高等学院　一九八六・三）

(d)千葉乗隆・光森正士・吉原浩人担当『真宗重宝聚英』第三巻『阿弥陀仏絵像・阿弥陀仏木像・善光寺如来絵伝』の「図版解説・総説」「［関連解説］真宗の『善光寺如来絵伝』とその絵解き」（同朋舎　一九八九・二）

(e)「刷物の『善光寺如来絵伝』七種――紹介と翻刻――」（『絵解き研究』第七号　一九八九・六）

（3）筆者の調査では、他に長野市善光寺大勧進があるのみである。なお、甲府善光寺宝物館においては、これら三本のうちいずれか一本が常時公開されている。

（4）かつて、坂井衡平『善光寺史』（東京美術　一九六九・五）において、甲本の二行ほどの簡単な紹介がなされたことがある。筆者は、註（1）において甲本・丙本のカラー図版を、註（2）(b)に甲本第一・二幅、(d)に第二幅のモノクロ図版を紹介し、部分図は(a)・(c)にも掲載したことがあるが、詳しい考察は行っていない。また、最近刊行された『甲府市史』別編II美術工芸（甲府市役所　一九八八・三）にも、甲本・丙本のモノクロ図版が掲載された。ただし、ここで甲本の成立を元和三年（一六一七）とするのは、修理銘中の年号を制作年と解したもので、「紙本著色」とする記述とともに明らかな誤りである。

（5）『善光寺記録』巻一。なお、後述の本稿第四節参照のこと。

（6）宇高良哲・吉原浩人『甲斐善光寺文書』（近世寺院史料叢書5　東洋文化出版　一九八六・一二）。

（7）甲府善光寺は、長野善光寺大本願第三十七世円蓮社光誉鏡空が開山したものであり、鏡空は永禄十年（一五六七）甲府にて遷化している。第三十八代の法燈を継いだのは遵蓮社本誉誓観であるが、天正十六年（一五八八）甲府にて遷化。第三十九世大蓮社円誉智慶時代の慶長二年（一五九七）七月、豊臣秀吉の命により善光寺本尊一光三尊如来は入京。秀吉の重病にともなって、本尊ならびに大本願上人は翌三年八月に信濃に帰還している。『善光寺如来絵伝』甲本の裏書にいう「御新仏別当三十八代」は、この善光寺大本願上人の代数を意識してのものであろう。当時の甲府善光寺の体制については不明なことが多いが、本尊一光三尊仏・大本願上人が京から信濃へ遷坐した過程で、甲府に残された僧俗に相当な混乱

が生じたことは容易に想像できる。なお、大本願歴代については、小林計一郎「善光寺大本願上人歴代」（『長野』第四五号　一九七二・九）に詳しい。

（8）甲本の成立に関する見解は、註（2）(d)において、既に表明している。

（9）この場面を一度しか描かずに代表させるのは、根津美術館本・本證寺本・太子堂本・淵之坊本・小山善光寺本。二度丁寧に描くのは、満性寺本である。妙源寺本は一部重複して描く。

（10）明治四十五年四月に、善光寺別当大勧進より活字本が刊行され、巷間に広く流布した。

（11）甲府善光寺は明治維新により、県令の弾圧を受け、明治五年十一月には、塔頭十八軒の還俗を余儀なくされるなどの大打撃を受けた。明治十六年には金堂屋根修理のための募金を開始していることから、その際の勧進に使用するために作成されたとも考えられる。しかしそうだとすると、有珠善光寺縁起を附す必然性がないので、やはり幕末期制作と考えられよう。

（12）註（2）(d)及び、吉原浩人解説・翻刻「善光寺如来絵詞伝」（伝承文学資料集第一一輯『絵解き台本集』　三弥井書店　一九八三・一一）参照。

（13）『蝦夷地大臼山善光寺縁起』は、須藤隆仙『日本仏教の北限』（教学研究会　一九六六・八）の引用による。また以下、同氏の研究に負うところも多い。

（14）増上寺の北海道開教については、村上博了『増上寺史』（大本山増上寺　一九七四・一一）第十章「北海道開拓と増上寺」参照。

（15）以下の記事については、徳田和夫「絵解き研究の契機」（『絵解き研究』第五号　一九八七・六）に簡単な指摘がある。

（16）以下の文献はすべて、註（5）『甲斐善光寺文書』に翻刻済み。

（17）この折のものと思われる『徳川忠長造営掟書（写）』が現存する。

（18）徳川忠長の前で縁起讃談した僧が「常円・玄等」とあるのは『善光寺記録』浄書時の誤写によるものであろう。この「玄」は「玄良」その人であると思われる。

（19）長野善光寺塔頭の淵之坊が「縁起堂」と呼ばれ縁起絵解きを担当していた（『芋井三宝記』）ように、甲府善光寺においても同様の存在があったのかもしれない。

（早稲田大学文学部専任講師　善光寺三丁目）